
百鬼繚乱

睦月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百鬼繚乱

【Nコード】

N5144V

【作者名】

睦月

【あらすじ】

この世の闇に《喰鬼》と呼ばれる存在がある。

その名の通り、人を喰らう鬼。

一度人を喰らうと、あとは闇へと堕ちて行く……。

自分のために堕ちてしまった彼を捜し求めるのが目的であったが、その先に巨大な陰謀が渦巻いていた。

審判が、今下される……。……。

序話（前書き）

久々に書いた小説になります。

誤字脱字や意味のわからない文面があるかと思われます。

そういったもので読み難いと思われるかもしれませんが。

何より、ただ勢いに任せて書いているため、ストックがありません。
仕事多忙なため、更新スペースが遅いですが、何卒最後まで長いお
付き合いをお願いします。

序話

静まり返った夜。

鈴虫の鳴く声だけが、闇夜に響き渡っている。

そんな深夜の人気のない深夜の公園に、25歳前後だと思われる女が静かに佇んでいた。

下は黒いジーンズに動き易い運動シューズを履き、上は白い無地のTシャツの上に黒いジャケットを羽織っていた。

容姿は美人というよりは可愛い部類に入るだろう。ただそのいで立ちと何より左目を中心に縦に5センチほどの切り傷が彼女が持つ雰囲気を変えている。

三つ編みにして背中に流している黒髪が、時折吹く心地よい夜風に揺れていた。

左肩には細長い何かが入った布を掛けている。

女は静かに両目を閉じ、何かを待つようにじっとその場に立っていた。

「やっと現れたか…」

凜とした言葉が静かに響き渡るが、周りには誰も居ない。

ザワザワと周囲がざわめき出し、先ほどまで澄んだな音色を奏でていた鈴虫の鳴き声が嘘のように消えてしまう。

涼しいと感じられていた風もピンツと張り詰め、肌を刺すかのようについに痛い。

突然暗闇を照らし出す周辺の街灯が点滅して灯りが消え、辺りを暗闇が包み込む。

時間にして、ほんの瞬きを数回するぐらいの一瞬で灯りが再び灯る。

周囲の異変に動じる事無く、女はゆっくりと閉じていた瞳を開き

肩越しに振り返る。

今まで誰も居なかったはずなのに、そこに髪の毛の長い少女が立っていた。

白い布を身にまとい、そこから覗く四肢は青白くその表情に生氣は感じられない。

少女を更に奇妙にさせてあるのが、裸足だということだ。

『何故、私の邪魔をするの…？』

幼さの残る声だった。ただどこか寂しく、どこか憎しみのこもった声。

年頃は１７歳ぐらいだろう。

無表情な少女は、さらに言葉を続ける。

『あの男は、どこにいるの？ 私は貴女に用はないの』

女はゆっくりと振り返り、少女を見据える。

右目はしっかりと少女を捕らえているが、傷がある左目だけはどこか視点が合っていない。

『これ以上、人を喰らうと堕ちてしまうぞ？』

『貴女に私の気持ちなんてわからないでしょ…』

少女の無表情だった顔が一変し、怒りと憎しみが入り混じる。

ゆっくりとその青白い右手を前にかざす。

突如女の背後でバキッと轟音が鳴り響く。

後ろに立っていた大きな松の木が一本、中腹部分がねじ切られたかのようにへし曲がり、隣の松の木に寄りかかっていた。

『これは警告よ。』

私の邪魔をしないで——」

少女の言葉に憎しみが滲み出ている。

ただその憎しみは女に向けられているものではない。

「私はお前の気持ち痛いほどわかる。だからこそ、これ以上墮ちてほしくないのだ」

『貴女に私の何がわかるっていうの?!』

今度は右手を振り上げて勢いよく振り下ろしたと同時に、女の目の前のアスファルトが大きく抉り取られる。

女は臆する事無く、一歩前が出る。

威圧されたのか、少女は一歩後退した。

「わかるさ。」

痛いほどわかるよ、神崎梓」

女は少女の名を口にする。

神崎梓。ここ最近のニュースを見ている人にとってはよく耳にしているはずだろう。

一ヶ月ほど前、ここ蔵之宮市で起きた強姦事件の当事者が上総高校に通う神崎梓である。

事件は深夜に起こった。

コンビニのアルバイトを終えた梓は、いつものように職場をあとにいつものように帰路へとついた。

アルバイト先から自宅まで徒歩10分程度だが、夜になるとぱったりと人氣が少なくなる。

彼女は足早に家へと向かったが、その途中に事件は起きた。

突然彼女の横にとまったワンボックスカーに、声を上げることなく中へと引きずり込まれ、埠頭へと連れ去られてしまったのだ。

そこで強姦され、無残にもその場所に捨てられていた。

翌日の朝に埠頭に来ていた釣り人に発見され保護されたと、という事件であった。

報道は最初の二日ほどテレビで流れたが、早代わりするニュースにすぐに報道されなくなった。

だが、その状況を一変させたのが、一週間後に起きた事件だった。警察は強姦犯のグループの目星をつけていた。

が、その矢先に次々とそのグループ犯が虐殺されるという事件が起きた。

殺された男たちのほとんどが、まるで野良犬……いや、狼にでも喰いちぎられたかのような、現職の警察官でさえ目を背けたくなるような惨状であったという。

もちろん、そんな奇怪な事件を世間が放っておくわけがなかった。連日連夜そのニュースで持ちきりで、知らない人はいないだろう。ただ当事者の神埼梓は、強姦に受けた事で完全に心が壊れてしまい、意識はあるもののまったくの抜け殻になり病院のベッドの上にいるはずである。

では、目の前に居る少女は……？

一部の人間にしか知られていない存在。

その者が持つ負の力に負け、闇に堕ちた存在。

それが、『喰鬼』と呼ばれる存在。

「私もそうだから」

女はニュースを思い出しながら、そつと呟く。

無表情な顔が一変し、目を丸くして驚く。

「私もお前と同じだ。」

この身体は穢れてしまっている」

『貴女も……なの？』

「ああ、そうだ。お前と同じように高校の頃、見知らぬ男たちに犯された。

今でも思い出す、男たちの視線とあの感触を」

『でも、貴女は堕ちていない』

「——堕ちたのは、婚約者だ」

彼女の場合、心が壊れることはなかった。

しかし、待っていたのは残酷な結末だった。

昏睡状態から目覚めたとき、母親は首を吊ってこの世を去り、父親もまた母親を追うようにしてこの世を去っていた。

当時婚約をしていた年上の彼もまた事件から数日後、突如として姿を消し家族さえ居場所がわからずにいたのだ。

この時も一過性にニユースに取り沙汰されたが、すぐに世間から忘れ去れていった。

一つの季節が巡ろうとした頃、今回の事件と同じように殺戮が始まった。

グループ犯は計6人の男達で動いていたというが、殺されたのは4人。

残る2人はどこかで生きていると思うが、殺されたというニユースは聞かない。

事件の関連性があると警察は睨んでおり、消息不明になっている婚約者を指名手配し探している。

彼女もまた彼を探すため、壊れかけた心を奮い立たせた。

彼女の左目に残る傷も強姦の際に受けたモノで、手術を施せば視力が回復すると言われたが彼女はそれを拒んだ。

幸か不幸か、それが運命だったのかはわからないが、彼女の左目は一種の力を宿す……。

「恋人は、いるのか？」

「……ええ、いつも私の手を握ってくれているわ。」

たぶん、今も……」

「なら、もうこれ以上人を喰らうのはやめろ。」

一度堕ちてしまえば魂は暴走し、関係のない者まで喰らってしまう」

生きている右目で、梓をじつと見据える。

沈黙が、辺りを包み込む。

先ほどまで無風だったのだが、ザワザワと風が吹き始める。

今までと違うのが、心地よい風ではなく、身体全体を突き刺すかのように痛々しい。

「もう、ダメなの……」

梓が口を開く。

女はハツとなり、今度は左目で彼女を見据えた。

焦点の合わない瞳が、薄っすらと紅く染まって行く。

そう、彼女が光を失い変わりに得たモノ。

《喰鬼^{オウガ}》の波動を読み取る力。

梓の身体全体を青白い光が覆っている。

鼓動と同じリズムで、青白い光が波打っているのがわかる。

梓は自分の顔を両手で押さえ、小刻みに震えていた。

「もう、自分の意思で止める事は出来ない……」

そう言った瞬間、彼女は左手を横一文字に薙ぎ払う。

女の左目が、彼女が薙ぎ払ったと同時に、青白い光が巨大な腕となり宙を切り裂くのを捉えた。

咄嗟にその場に屈み込み攻撃をかわす。

背後の木々がメキメキと音を立てて倒れていく。

「もう手遅れだったのか」

そう口惜しそうに呟くと肩に掛けていた布の口紐を解き、中から真紅の日本刀を取り出す。

女の彼女でも扱えるように少し小振りになっている、彼女専用の日本刀である。

梓との間合いを取り、一呼吸を置き、ゆっくりと鞘から刀を抜いた。

「今、楽にしてやる」

女は、そうやさしく呟いた。

序話（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。
それらを励みにして、まい進して行きたいと思っています。
よろしくお願いします。

第巻話 『始まり』（前書き）

時間がだいぶたつてしまいました。
頑張つて書いていきたいと思いますので、よろしく願います。

第壱話 『始まり』

Ｔ市の郊外にある千寿院と呼ばれる寺の駐車場に一台の紅いスポーツバイクが停まった。

バイクから降りた女――――かがり なつき篝夏希は、いつもと変わらず無地の白いＴシャツの上に黒いジャケットを羽織り、黒のジーンズを履いていた姿だった。

被っていたフルフェイスと羽織っていたジャケットをバイクのハンドルに掛け、お寺の中へと入っていった。

千寿院の近くには蔵野川が流れていて、そこから流れ込んでくる風が心地よい。

静寂の中、彼女は墓地の中を歩いて行く。

墓地の一角で立ち止まり、そとその場にかがみ込む。

墓石には神崎家と刻まれていた。

そう、ここは一週間ほど前に出会った少女の眠る場所である。

「約束通り、逢いに来たよ」

夏希は優しく囁いた。

男物のヒップバックから線香とライターを取り出し、線香に火を灯して線香立てに立てかけた。

秋風が優しく彼女の頬を撫でて行く。

まるでありがとう……と言っているかのように。

直接病院へ訪れる事はしなかったが、情報屋によると家族や恋人に看取られ彼女は安らかに眠りについたという。

闇に堕ちた《喰鬼》の最後に安らぎはない。

魂は永遠に闇に繋がれ、救われる事はない。

だけど、いつも思う。

いつも感じてしまう。

何が正しいのか、と。

闇から救う事が正しいのか。

逆に復讐を成し遂げた方が正しいのか。

自問自答しても、答えを導く事は出来ない。

自ら望んで堕ちた者、望まなくて堕ちた者など《喰鬼》になる者は人それぞれ理由があり、他人からすればどうでもいいような事だろうと、本人にとっての“陰”が人を鬼へと変えてしまう。

例えどんな理由があろうとそれを狩るのが仕事なのだと、ずっと自分に言い聞かせてきた。

自分自身の、目的の為に――……。

「君のような子と出会った際に、いつもそれでいいのだろうかと考えてしまうよ」

少しの間をおく。

「それでも――……。それでも、私は私の目的のために、あなた達を踏み越えて行く」

改めて思い出した。

何故、自分がこの道を歩んだのか、を。

そして、その目的のためには手段を選ばないと覚悟した事を。

人気のない境内の来た道を戻ると、正門の所に人影が見えた。

「何の用だ、宗麟」

ぶつきら棒にその人影に話しかける。

大柄な男で、彼の名は橘宗麟。

恰幅の良い体育系の体格に、だいぶ涼しくなっているはずなのに未だに半袖のＴシャツにジーンズという格好である。

細い瞳が、頭上から夏希を見下ろす。

「相変わらず可愛くねえお嬢だ」

「私はお前達と馴れ合う気はない」

「これを見てもそんな事が言えるのかねえ？」

宗麟がＢ５ほどの一枚の封筒を、彼女の目の前でひらひらとかざす。

封筒を見た彼女の表情が苦虫をつぶした表情になり、頭を軽く抱える。

「悪かったよ、宗麟」

「どちらか言えば、パシリにされた方が気に喰わないが……」

サツと宗麟の手から封筒を奪い取る。

宗麟は呆れたように、頭をかきむしる。

封筒の表面に薄く、橘家の家紋《桔梗紋》が描かれていた。

橘一族は戦国時代に名を馳せた明智の流れを汲むと言われている、家紋に桔梗が使われている。

橘家は古くからの家柄であり、ここＴ市での権力を相当持っていて、政治の政界にかなり深く関与している。

それはあくまでも表の顔であり、本来の姿はこの地の安定化を目的として鎮守組織されたのである。

大地に大きな霊力を溜め込むこの日本国では、古来より良くも悪くもその力を利用し繁栄と滅亡を繰り返してきた。

巨大な力は、人間の“陰”を喰らい、悪鬼を創り出す。

それが《喰鬼》と呼ばれる存在。

橘家のように全国各地に組織された鎮守職が存在するが、ここ最近になりT市——特に蔵乃宮と呼ばれる地域を中心に、怪奇現象が多発するようになっていた。

神崎梓の件もその一つである。

今までも度々起きてはいたが、そういった事件は表面化する事はなかった。

何かが起ころうとしている——……。

それが橘家の見解であつたが、その『何か』は未だにわからずにいる。

だからこそ、地道に起こる怪奇事件を一つ一つ解決していくしか方法はなかった。

この地の鎮守を任されているとはいえ、橘の人間だけでは到底力バー出来る範囲はしれている。

そこで彼女のように、報酬を元に契約を交わす異端の者がいるわけである。

夏希の場合は、たった一つの情報と引き換えに橘家に身を置いていた。

「ハッキリと写っていないが、間違いないと思う」

宗麟の言葉に、彼の顔を一度見て封筒から中身を取り出した。慌てて撮ったのだらう、ピントがかなりずれている。

どこか街の繁華街だらうか、かなりの人混みが写っていた。そんな写真を見た夏希の目から、一筋の涙がこぼれ落ちる。

彼女自身、涙を流したことなど気づいていないかもしれない。

「そう、生きていたのね……」

安堵と同時に、悲しみが彼女を包み込む。

生きているという事は、滅しなけければならないという事。

一度堕ちた人間は、二度と人には戻れない。

人ごみの中に、ハッキリと写っていないが黒い外套コートに身を包んだ男が歩いている。

写真からでも異様な雰囲気を放っている。

「これは、どこで？」

「東京だ。」

確か、一ヶ月ほど前だと思う」

再び写真に視線を落とす。

何度見ても、変わりはない。

おそらくは彼自身の年齢も変わっていない……。

（確か、最後に会ったのは……）

記憶の中の、最後の彼の姿。

薄れ行く意識の中で、いつも優しい彼が初めて見せた怒りに満ちた顔。

何か、言っていた。

何を言っていたか、最後の言葉は今になっても思い出せない。

あの時27歳だったはずなので、本来であれば35歳になっているはずである。

「大丈夫か？」

「ああ、問題ない。」

これは、貰っているのか？」

「うむ、そのつもりで持ってきている」

写真を封筒に戻し、ヒップバック中に入れる。

これからどうするべきか、悩んだ。

このまま情報を集めるためにこの地に留まるか、写真を手がかり

に東京へ出るべきか。

出て行くには問題ないのだが、問題があるとすれば異端の力はその土地でしか最大限に力を行使できない。

鎮守職である橘家がこの地の鍵であり、力を制御している。

それ故に橘家と“契約”を交わしている。

異端の者を自らの土地に留め、別の土地へ行き問題を起こさせないためだ。

各地の鎮守職とは、縄張り意識が高い。

「その顔は、行きたいという顔だな」

宗麟がにやつと笑う。

夏希はその顔を見た瞬間、一瞬で想像がついてしまった。

その答えが、彼の口から放たれる。

「我が橘家十三代当主、橘穂乃香の命より、篤夏希に召集の任を渡し仕る」

ああ、やつぱりね……。

この世で一番行きたくない場所に行かなければならない事は、宗麟より封筒を受け取った時点で薄々感じてはいたが――……。

夏希は小さくため息をつき、嬉しそうにやける大男を恨めしうに見上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5144v/>

百鬼繚乱

2011年11月18日04時30分発行